

觀 測 部 月 報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東 亞 天 文 協 會

★太陽課 SUN.

1943年七月も、一帯に天氣は悪く、各地で觀測に困難があつたやうであるが、しかし其の中に於いて、保積氏が25ケ日の觀測を遂げられたのは實に驚異的な努力である。此の如き勤勉な觀測者が、東京と近畿と九州とに一人づつ居られれば、他の觀測者は不要であるとさへ考へられるほどである。しかし天氣といふものが、全く人力を超越した難物で、コントロールが出来ないものだから、之れに打ち克つためには、やはり多數の觀測者が必要である。

藤吉氏は此の月中、2ヶ所で、別々の器械を使はれたので、全く別の行に配列した。條件が全く違ふのだから、これを一括には出来ない。

幸ひに、今度も各員の協力により、全欠の日が無く、よく太陽活動の状態を捕へることが出来た。

筆者も、田上の第二觀測室に於いて、口径10糎の屈折機に投影板を裝置して時々太陽面を見てゐるのだが、今暫く、旅行や外出が多くて、欠測續きになり勝ちのため、月例報告面には載せないが、其のうちに、是非諸君の仲間入りがしたいと思つてゐる。

かねて書いた通り、太陽課の會合を開きたいが、課員諸氏の都合の良い日を知らせて貰ひたい。

別項の如く、(本誌次號に)伊達氏から、太陽の事業について意見を開陳され筆者も亦それについて所懐を述べた。數年前から、本課の充實すると共に、從來の觀測法や、報告形式について、改良意見を有つ人々が多くなつた。筆者はしかし、全く新しい觀測(例へば、白紋とか、紅焰とか、太陽面上の經緯度とか、ヘリオスコープ觀測とか)をやるのなら、賛成であるけれど、從來の黒點數と群數とを數へるやり方は(觀測日數をもつと努力して増すことは希望するが)決して不満足でないと思ふから、なるべく改めない方が宜いと思ふ。従つて、“相對數”といふものの計算法も、改めないで、これは此のまゝ二三百年續けなければならないと考へてゐる。太陽のやうな永い壽命の天體の變動を見るためには十年や二十年毎に觀測法を變へてゐては、良い材料とならない。

(1943-8-6)

太陽黑點相對數報告 (1943年七月) Sun-Spot Relative Numbers, July, 1943.

觀測者	藤吉 泰男	西山 峰雄	秋澤昭二 郎	恒岡 美和	植田 耕作	西尾 敏夫	吉野 昭三	正田 源一	木邊 成磨	竹内 潤	保積善 太郎	坂上 務	青木 章	赤坂 陽	香掛 七二
Obs.	YH	MN	SA	YT	KU	No	SY	GH	Kb	Tu	Hz	Su	Ai	AA	Kk
(觀測地)	(福岡市)	(久留米)	(福岡市)	(高知市)	(姫路市)	(大阪市)	(大阪市)	(大阪市)	(中里村)	(名古屋)	(東京都)	(福岡市)	(大阪市)	(東京都)	(長野縣)
口徑 mm	50	30	32	32	36	32	145	150	38	75	32	76	42	75	102
倍率 x	44	70	45	54	60	50	75	75	65	60	50	64	64	50	75
方法	D	D	D	P	D	D	P	D	D	D	D	D	P	P	D
1	R		R	C	R	0	R		R	R	R	0	R	R	0
2	R		R	C	R	R	R		R	R	R	0	R	R	C
3	R		R	13	C	R	0		R	R	R	R	R	R	R
4	R		M	0	0	R	0		0	R	R	R	0	R	M
5	0		0	R	0	C	C		C	M	R	0	C	R	M
6	R		R	16	0	0	0		0	0	C	0	R	0	0
7	R		M	R	0	R	0		0	0	0	C	0	0	0
8	12		14	C	M	C	14	16	14	M	13	M	13	M	12
9	16		14	39	14	26	15	18	17	29	18	15	M	16	16
10	16		16	29	20	31	32	19	21	38	25	27	19	20	18
11	17		18	30	17	31	M	31	22	C	28	19	30	18	29
12	26		17	49	13	29	M	28	18	28	23	21	M	23	29
13	25		17	43	12	29	M	24	17	43	28	33	M	20	26
14	M		17	51	13	29	16	19	17	22	22	20	C	18	23
15	23		M	27	12	25	12	18	M	22	21	23	C	15	23
16	23		M	25	12	25	15	17	13	17	20	20	R	15	23
17	22		13	28	11	R	12	14	M	13	18	16	13	14	22
18	11		11	27		R	M		11	12	16	12	11	11	11
19	11		11	12		0	R		R	R	R	11	C	R	11
20		0	M	11	旅	R	0		R	R	R	0	11	R	M
21		M	M	R		R	0		0	0	0	11	C	0	0
22		R	M	R		0	0		C	R	0	0	C	C	M
23		R	M	R	行	0	0	0	M	M	0	0	C	0	M
24		0	M	R		0	0	0	M	M		0	13	M	M
25		M	C	R		R	R		R	R		15	C	R	M
26		0	12	12	中	R	R		R	R		14	C	公	M
27		C	C	R		0	11	12	11	11		12	C	用	M
28		13	M	12		0	26		26	27		25	R	M	M
29		C	23	12		0	24	13	24	26		24	R	M	M
30		11	11	C		0	11	12	11	11		11	M	M	M
31		11	11	13		0	11	13	M	M		11	M	欠	M
平均 Mean	16		14	28	9	12	9	16	13	18	16	12		11	15
日數 Days	12	6	15	18	18	19	21	17	17	17	13	29	6	15	16

★流星課 METEORS (140) 課長 小嶺孝二郎 (Koziro Komaki, President)

九月に入ると流星数はづつと減少するが、一年の平均数よりは多い。顯著な流星群はないが、十月とも合せて、次のものの出現が豫想される。September and October Meteors:

期 間	極 大	輻 射 點		附近の星	備 考
		α	β		
八月30日→九月2日	1 日	86°	+41°	馭 者 τ	速, 1911 II
九月中 一 下 旬		13	+ 6	魚 δ	緩
21日頃		31	+19	羊 α	緩
27日頃		4	+28	アンドロメダ α	緩
下 旬		23	0	鯨	
十月 8日頃		77	+31	牛 β	緩
9日頃		263	+54	龍 ν	ジャコビ彗星
15日~25日		92	+15	オリオン ϵ	速, 痕
20日~25日		98	+14	双 子 γ	速, 痕
十月 —— 十一月		43	+22	羊 41	緩, 輝

上記の中、最も顯著なものは十月下旬のオリオン、双子より放射する流星群であるが、本年は21日に月が下弦となるので、極大期の22~23日頃は月の妨害は少い。會員各位の観測を切望する。

編 輯 室 よ り

前號は、印刷に非常に時日を要し、遂に發行日の變更を行ふことにもなつたので、讀者諸氏に大變御心配をかけたが、しかし、あの號の出来ばえを見て、喜んで下さつた方々が多かつたので、ホツとした。しかし、發行日は今尙延びたまゝになつてゐるので、何とか本號の印刷を一日でも早く終りたいと思ひ、心ならずも机上に山積してゐる原稿を暫く抑へて、こんどは本文24頁、附録8頁の形で出すことにした。次號や次々號に出すべき文の中には、吉岡修一郎氏の占星術、津田雅之氏の陣鐘、齋藤馨兒氏の流星群、渡邊敏夫氏の日本幕末時代のプラネタリウム、伊達山本兩氏の太陽觀測法論議、森岡孝雄氏の日時計、主幹の國民天文教程、平山窪川木村三氏の小傳等がある。大に期待して頂きたい。

木村榮博士が逝去された。今年は我が國天文學界に於いて多くの碩學を失つたことを悲しむ。木村博士のことは本誌にも度々書いたが、近號に又追悼文を載せなければならぬ。(1943~9~26)